

個人発表 1

氏名：宮永三亜（京都大学）

題目：アーレント思想におけるテクノロジーと公共性——研究動向の整理と今後の課題

Technology and Publicness in Arendt's Thought: A Survey of Research Trends and Future Directions

本報告の目的は、近年注目を集めている「アーレントのテクノロジー論」について先行研究を整理し、現代的視座から見た研究課題を抽出することである。

テクノロジーが急速に進化し、専門性が深化する現代においては、科学研究への市民参画や、市民と専門家の対等な科学コミュニケーションのあり方が盛んに研究・実践されている。他方で、専門家による科学的助言は 2010 年代以降重要性が認識され、制度が整備され始めた。こうした市民参画と専門家の役割の双方を踏まえた上で、公的領域における科学技術の位置付けをいかに捉えるべきかという現代的課題に対して、アーレント思想はいかなる可能性を有しているのか。本報告はこの問いを出発点とし、国内外の先行研究を概観しつつ、「アーレントのテクノロジー論」の思想的意義と、今後の研究課題を検討することを目的とする。

アーレントは 20 世紀半ば、急速に進展する科学技術に対して強い危機意識を抱いていたが、彼女のテクノロジー論はこれまでアーレント研究および技術哲学の分野において周縁的な位置にとどまっていた。しかし 2010 年代以降、国内外においてその関心は高まりを見せている。これまでの研究動向を整理すると、①アーレントのテキストにおける断片的言及の再構成による理論抽出、②他の思想家との比較検討、③現代的課題への応用という三つの傾向に分類できる。多くの研究は複合的な視点を含んでいるが、近年はとりわけ三つ目の実践的・応用的アプローチに基づく研究が増加している。日本においては、2011 年の原子力発電所事故を契機とした現代的視座からの研究が顕著に見られ、こうした動向は日本固有の社会的背景を色濃く反映している。

多くの先行研究は、『人間の条件』に基づき、テクノロジーから疎外された市民による、言論行為の重要性を明らかにしてきた。しかしながら、テクノロジーの領域で何が起きているかを市民が理解することが難しくなっている現代においては、専門家の積極的な関与を含む公共性のあり方を再考する必要があるだろう。今後の「アーレントのテクノロジー論」研究における課題として、『革命について』や「真理と政治」などのテキストから、公的領域における専門家や科学的真理の役割を精査する必要がある。本報告では、これらを踏まえつつ、公共的な科学技術のあり方をより具体的に描出するという今後の研究の展望を提示する。

個人発表 2

氏名：小森達郎（立命館大学）

題目：アーレント「連帯」概念の探究——「社会問題」批判の再考にむけて——

An Investigation of Hannah Arendt's Concept of "Solidarity": Toward a Rethinking of the Critique of the "Social Question."

一九六三年に公刊した主著のひとつ『革命について On Revolution』のなかで、アーレントは、論者からつとに悪名高い次のような一文を書き残している。「今日、政治的手段によって人類を貧困から解放しようとする以上に時代遅れなものはないし、それ以上に無益で危険なことはないといえよう」（『革命について』原著 p.104／邦訳 169 頁）。ここでアーレントは、フランス革命の進路においてその喫緊性ゆえに政治的解決の方途が模索された大衆的貧困という「社会〔貧困〕問題 social question」を、政治問題として取り扱うべきではないと論じている。そしてその理由として、「過去の革命の記録全体が、疑問の余地がないほどはっきりと示しているように、社会問題を政治的手段で解決しようとする試みはいずれもテロル terror を導き、ひるがえってそのテロルこそ革命を破滅に追いやる」からだと主張している（『革命について』原著 p. 102／邦訳 166 頁）。「社会〔貧困〕問題」を「政治的なもの」の射程から除外しようとするアーレントの「社会問題」批判は、彼女に肯定的な論者からも、その「政治」概念が、現代社会の諸問題に適用するにはあまりにも狭隘な概念だとして異議が提起されている。論者たちを困惑させた上記引用文でアーレントはいったい何を主張しようとしたのか。アーレントの「社会問題」批判とは、つまるところ、「人間のニーズに関連した様々な社会問題を政治化することに対する彼女の嫌悪感の完璧な表明」（Gündoğdu 2015: 56）でしかないのか。

本報告では、アーレントの「社会問題」批判の含意を再考するために、以下二点の論点に着目しつつ、英語版『革命について』および独語版『革命論』における彼女の立論を追跡してみたい。第一に、フランス革命の進路で浮上した「社会問題」の政治的解決を目指した、ロベスピエールの「徳」に基づく「人民」との「連帯」に対するアーレントの批判を取り上げる。報告者の見解では、アーレントは、ロベスピエールらフランス革命の人びとが、「社会問題」を「政治化」したことそれ自体を批判しているわけではない。そうではなく彼女の批判の眼目は、フランス革命の人びとが「社会問題」を解決するにあたって「反政治的なアプローチ」（Gündoğdu 2015: 70）を採用した点にある。アーレントによれば、ロベスピエールの「徳」に基づく「人民」との「連帯」とは、革命家たちに対して、貧窮にあえぐ「人民」の悲惨さに「哀れみ」をもって応答することを迫るものだった。「人民」の「大海の如き悲惨さ」（『革命論』原著 S. 121／邦訳 117 頁）と共鳴することで、革命家たちの「哀れみ」は、政治的領域において無際限に暴走し、その結果、「社会問題」の政治的解決に「失敗」してしまったのである。

そのうえで第二に、アーレントの「社会問題」批判は、フランス革命で見られた「社会問題」に対する「反政治的アプローチ」の危険性を指摘するのみならず、この危険性をふまえ

たうえで「社会問題」を「政治化」するための方向性も示唆している。それが、ロベスピエールの「徳」に基づく「連帯」とは異なる、もうひとつの「連帯」——「活動を鼓舞し導く原理」（『革命について』原著 p. 79／邦訳 133 頁）に依拠した「社会問題」に対する「政治的アプローチ」という方向性である。それでは、アーレントが特徴づけた「連帯」概念に基づく「社会問題」の「政治化」はいかにして可能となるのか。『革命について』および『革命論』において、アーレントはみずからの「連帯」概念について必ずしも体系的に論じてはいないが、本報告では、彼女の「連帯」概念に着目した近年の研究も参照しつつ、「連帯」に基づいた「社会問題」の「政治化」の方途について、いくつかの見解を提示してみたい。

参考文献（報告概要で直接引用したもののみ記載）

- Arendt, Hannah. [1963] 2006, *On Revolution*, Penguin Books. (= [1995] 2007, 志水速雄訳『革命について』ちくま学芸文庫.)
- . 1965, *Über die Revolution*, Piper. (= 2022, 森一郎訳『革命論』みすず書房.)
- Gündoğdu, Ayten. 2015, *Rightlessness in an Age of Rights: Hannah Arendt and the Contemporary Struggles of Migrants*, Oxford University Press.

個人発表 3

氏名：林大地（京都大学）

題名：アーレントの Rilke 論——「Rilke の『ドゥイノの悲歌』」（1930）をめぐって
Arendt on Rilke: A Study of “Rilke’s *Duino Elegies*” (1929)

アーレントは、博士論文『アウグスティヌスの愛の概念』（1929）を刊行したのち、翌年の 1930 年、当時の夫であるギュンター・アンダース（当時はギュンター・シュテルン）との共著というかたちで、*Neue Schweizer Rundschau* に、論考「Rilke の『ドゥイノの悲歌』 *Rilkes Duineser Elegien*」（以下、RDE）を発表した（未邦訳）。よく知られているように、アーレントは主要著作——『人間の条件／活動的生』『過去と未来の間』『精神の生活』など——の重要な箇所において、Rilke の詩をたびたび引用している。それゆえ多くの研究者にとって、アーレントが Rilke から受けた影響の大きさは周知のことだろうが、それにもかかわらず、アーレントが残した唯一のまとまった Rilke 論である RDE は、これまで主題的に論じられることがほとんどなかった。

しかし RDE では、埋もれたままにしておくにはもったいないほど、多くの重要なテーマが論じられる。「世界疎外」「故郷喪失」「見捨てられていること」といったテーマ、あるいは「愛」「死」「物」といったテーマは、RDE においてすでに中心的な位置を占めており、これらは後年のテキストにも——全体主義という出来事を経て、大小の変容を被りつつ——引き継がれることになる。また個別のテーマを超えて言えば、RDE にはアーレントの思想を象徴する「世界への愛 *amor mundi*」の萌芽（直接的な起源とは言えないにせよ）を見ることが出来る。すなわち、アーレントが「世界への愛」を抱くに至ったきっかけのひとつとして、そこには『ドゥイノの悲歌』（以下、『悲歌』）との出会いがあったのではないかと、それゆえ「世界への愛」の思想を跡づけるうえでは、RDE も参照する必要があるのではないかと、というのが本稿の仮説のひとつである。

Rilke は『悲歌』のなかで繰り返し、人間が天使と隔絶していること、また人間が無常であることを歎くが、人間が宿命的に背負わされたそうした悲痛や苦悩にもかかわらず、Rilke は最終的に、この地上での存在、すなわち「この世に在ること *Hiersein*」を肯定しようと決意する。無論、同じ「世界肯定」と言っても、「世界」概念をめぐるのは、アーレントと Rilke のあいだに看過できないずれ違いも存在するため、単純にふたりを重ね合わせることは慎まねばならない。しかし「世界」にたいする Rilke のこうした姿勢には、否定的なものを見据えつつ、それでもなおこの世界を肯定しようとする姿勢、すなわち「直接的な世界肯定」ならぬ「否定媒介的な世界肯定」を見て取ることが出来るだろう。それは、それにもかかわらずの「世界への愛」である。

以上を踏まえて本発表では、(1) RDE の読解を中心として、アーレントが『悲歌』に何を読み取り、そこから何を引き出そうとしたのかを分析すること、(2) RDE と後年の著作のつながりを、とりわけ「物」という視点から分析すること、そしてその分析を通じて、アーレントの「物」論の思想的源泉として、これまで取り上げられてきた後期ハイデガーの技術

論に加えて、リルケの『悲歌』もそこに付け加えること、(3) RDE と後年の著作のつながりを、とりわけ「世界」という視点から分析すること、そしてその分析を通じて、「世界への愛」の思想を跡づけるうえでの RDE の必要不可欠性を浮かび上がらせること、の三点を目標として据える。まとめれば、RDE の内容を分析すること、また RDE を「物」と「世界」という視点から読み込み、後年の著作とのつながりを考察すること、そしてそうすることでアーレント思想全体のうちに RDE を位置づけること、それが本発表の目指すところである。なお本稿では、アーレントとアンダースの往復書簡集である *Schreib doch mal hard facts über dich: Briefe 1939 bis 1975* (Piper) に収録されている版の RDE を用いる。